

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	生き直される「サバイバー」の生：村上春樹「海辺のカフカ」論
Author(s)	山根, 由美恵
Citation	近代文学試論, 55 : 39 - 53
Issue Date	2017-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/49041
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049041
Right	
Relation	



生き直される「サバイバー」の生

— 村上春樹「海辺のカフカ」論 —

山根 由美恵

はじめに

「海辺のカフカ」(二〇〇二)は、「サバイバー」の物語であり、かつ「サバイバー」たちの記憶を受け継ぐ物語ではなからうか。「サバイバー」とは、「生き延びた者 (survivor)」であり、「虐待や災害など、さまざまな原因から生じた傷を、心や身体に負つても、なんとか生き延びている人」のことである。子どもものころ機能不全家庭に育つたなどの原因から、しかるべき成長をバランスよく迎えることができないまま成長し、大人になってからも一定の特徴を持つているため、いろいろな場面で社会的な生活が困難となっている人々のことを言う。主人公田村カフカ、佐伯さん、ナカタさんは、虐待や恋人の死などにより、尋常でない心の傷を受けつつ、かろうじて生きてきた「サバイバー」である。本稿では、「海辺のカフカ」というテキストが「サバイバー」たちの回復の物語であること、また「サバイバー」の生が「サバイバー」ではない人間(星野青年)に受け継がれ、生き直されてゆく物語であることを明らかにしたい。それは次のように岡真理氏が述べる「出来事」の記憶の分有²⁾について、一つの可能性を提示すると考えるからである。

〈出来事〉の記憶を分有するとはいかにしたら可能だろうか。〈出来事〉の記憶が他者と分有されるためには、〈出来事〉は、まず語られねばならない。伝えられねばならない。〈出来事〉の記憶が他者と共有されねばならない。だが、〈出来事〉の記憶が、他者と、真に分有されるような形で〈出来事〉の記憶を物語る、とはどういうことだろうか。そのような物語は果たして可能なのか。

*

浅利文子氏が的確に述べるように、「海辺のカフカ」は「(父殺し)システムとの闘い」の物語(カフカ章)と「(異界往還による生の意義回復と鎮魂)の物語」(ナカタ章)により構成され、「(システム)下で個を蹂躪された現代人が異界往還という内的経験によつて生の意義を回復する」というテーマが描かれている。³⁾ テキストの構造は氏の指摘通りと思われるが、「現代人」という漠然とした括りには検討の余地がある。先に述べたように三人は「サバイバー」であり、それぞれ解離の症状⁴⁾を発症するほどにそのトラウマは深い。現代人という大きな括りに整理してしまう前に、テキストにおける「サバイバー」の設定および、「サバイバー」でない者(星野青年)の役割について分析を行ってみたい。

主人公カフカが解離性同一性障害であることは既に多くの研究で言及されてきた。⁽⁵⁾カフカは友人を作らず自身の世界に閉じこもり、別人格のカラスと呼ばれる少年と内的会話をしている。また抑えきれない衝動で他人に暴力を振るった過去を持つ。加藤典洋氏はカフカと酒鬼薔薇聖斗少年との共通性を見だし、テキストを少年カフカが自分を棄てた母を許す「自己回復」の物語として捉えた。⁽⁶⁾解離性同一性障害はサバイバーの症状の一つであり、⁽⁷⁾本稿でも先行研究の成果(カフカが解離性同一性障害であること)を援用し、その上でカフカを「サバイバー」として論を進める。また、ナカタさんが解離性健忘であること、その症状を生み出した戦争との関係においても研究成果がある。⁽⁸⁾解離性健忘も「サバイバー」の症状の一つであり、ナカタさんを「サバイバー」とみなす。

本稿では、これまで取り上げられることが少なかった佐伯さんの「サバイバー」性、およびカフカ章の補助的な役割で捉えられることが多かったナカタさん・星野青年に着目する。特に、星野青年はこれまで看過されることが多かったが、⁽⁹⁾星野青年こそが「サバイバー」であったナカタさんの生を受け継ぎ、ナカタさんの生を生き直させる可能性を残す重要な存在であることを述べる。「サバイバー」でない者が「サバイバー」の痛みを受容してゆく構図は、「記憶の分有」と密接に関わるからである。

一、母の〈怒り〉——佐伯さんの物語——

「海辺のカフカ」は、〈母に捨てられた〉主人公カフカの自己回復物語であることは言を俟たない。カフカは、自らの回復(救い)には佐伯さんの怒りを理解する事が必要とカラスと呼ばれる少年から論される。(君の母親の中にも

やはり激しい恐怖と怒りがあったんだ。今の君と同じようにね。だからこそ彼女はそのとき、君を捨てないわけにはいかなかった」、「君がやらなくちゃならないのはそんな彼女の心を理解し、受け入れることなんだ。彼女がそのときに感じていた圧倒的な恐怖と怒りを理解し、自分のこととして受け入れるんだ。それを継承し回復するんじゃないやなくてね。言いかえれば、君は彼女をゆるさなきゃいけない。それはもちろん簡単なことじゃない。でもそうしなくちゃいけない。それが君にとっての唯一の救いになる。そしてそれ以外に救いはないんだ」^(43章)。

このように、佐伯さんの〈怒り〉を理解することはテキストの鍵と言えるが、これまで佐伯さんの〈怒り〉の内実の追究は積極的に行われてこなかった。彼女の語りが少なく、人生を記した手記も読まれることなく焼却されたからである。小森陽一氏は佐伯さんの手記が燃やされたことについて、「戦中・戦後の歴史の否認、否定、消去、焼却」と激しく否定した。⁽¹⁰⁾また、「1Q84」の母について『海辺のカフカ』と比較しながら論じた平野葵氏は『海辺のカフカ』において、〈母〉は息子によって発見され、許される。秘密を抱えたまま死んでいく佐伯は深く沈黙する存在である。これは処女作『風の歌を聴け』の小指のない女の子に始まり『ノルウェイの森』の直子に代表される、かつての村上作品における女性たちそのものであり、佐伯の過去が綴られたと思しき〈母〉⁽¹¹⁾生成の物語は、彼女自身の意志により火葬されてしまう」と述べている。本節では、沈黙したかにみえる彼女の物語を「サバイバー」概念を基軸に、佐伯さんの持つ両義性(母であり恋人である設定)とともに追究したい。

一―1 子を捨てた母

「一般的な意味を超えて、もっと個人的に病んでいるんだ。魂の機能が普通の人とはちがった動きかたをしていると言っているいかもしれない」(17章)と説明される佐伯さんは、魂が生きながら彷徨う人間として描かれている。彼女の魂が生きながら彷徨うことになったのは、最愛の恋人の死が原因である。佐伯さんは幼馴染みの恋人と二人だけの完全な円の中に生きていた。成長し大人になり、時代が移り変わっていた中で、二人が築き上げた完全な円の維持が難しくなっていく。佐伯さんはそれを防ごうと入り口の石を開くが、その結果、最愛の恋人を失ってしまう。一心同体であった恋人の死によって、彼女の心は病む。普段の生活においても、心を別の所に置いて振る舞っている(「この人にはこやかに俺たちの顔を見ている。しかし同時に何も見ちゃいない。つまり俺たちを見ているんだけど、同時に違うものを見ている」)、彼女はそのような実際のな役割を的確にこなすことを、ある部分では喜んでもいる。ただ心がそこにはないだけだ」(40章)。

このような状態は、離人症(離人症性障害)と類似している。

サバイバーは苦痛な体験に繰り返し出会ううちに、その体験中の自分を放心状態しておく術を会得するようになった人でもあります。この術は、一種の自己催眠ですが、これに熟達すると体験したことが現実感を持って想起できなくなりません。中には放心したまま、はた目には異常を感じさせないのでも「夢の中に生きる」ようにして生きている人もいて、この放心状態を離人症とか離人症性障害といいます。何かのきっかけで離人症が始まる場合もあり、そのときには自分の「たましい」が自分から抜け出て、自分のやっているこ

とを外から見ているという一風変わった体験(幽体離脱)を味わうこともあります¹⁰⁾。

解離しなければ生きてゆけないほどに佐伯さんの心は傷ついていた。「私にとつての人生は20歳のときに終わりました。それからあとの人生は、延々と続く後日談のようなものに過ぎません」(42章)。佐伯さんの人生は、恋人が亡くなった二十歳の時点で停止した。その後の人生は、「ある時には私は一人で内側に引きこもって生きました。深い井戸の底で一人で生きているようなものでした。外にあるすべてを呪い、すべてを憎みました」(42章)。生きながらえてしまった人…「サバイバー」として、佐伯さんは、ある時は全てを呪い、ある時は空虚に日を過ごしてきた。

母の可能性がある佐伯さんが少女の生霊と分離することで、カフカは佐伯さんの少女である部分に宿命的な恋心を抱き、母的な部分に母を求める。テクストに設定されたオイディプス神話の構造をなぞるように、二人は肉體關係を持つが、二人は自らの意志で肉體關係を持ったとは言えない。初めて肉體關係を持った際、佐伯さんは眠っていると描写される(彼女が眠っている。僕にはそれがわかる。たしかに目は開いている。でも佐伯さんは眠っているのだ。彼女はすべての動作を眼りの中でおこなっている) (29章)。佐伯さんはカフカをずっと昔に死んでしまった恋人の少年だと思いきみ、肉體關係を行う。カフカは「これは夢じゃない。現実の世界なんだ」(29章)と実の母かもしれない女性との肉體關係を躊躇しつつ、流れを止めることができない。

夢と性について、村上は「セックスは鍵です。夢と性はあなた自身のうちへと入り、未知の部分さをさぐるための重要な役割を果たします」、「そうした場面は、先ほどお話しした隠れ扉を、読者が自分で開くことを可能に

してくれるからです。僕は読者の精神を揺さぶり、ふるわせることで、読者自身の秘密の部分にかかった覆いをとりのぞきたい」と述べている⁽¹³⁾。性と夢は佐伯さんの奥に隠された闇に迫るための展開、「読者自身の秘密の部分にかかった覆いをとりのぞく衝撃として描かれている。

ただ、母に捨てられた子であるカフカと最愛の恋人と死に別れた佐伯さんは、どちらも「サバイバー」であるため、二人の恋は一般的な恋愛感情ではなく、双方とも欠けてしまった自らの一部を探す行為となっている。つまり、カフカは佐伯さんに母を求め、佐伯さんはカフカに恋人を重ねている。母であり恋人である佐伯さんとの肉体関係は、近親相姦のタブーを破るという意味合いよりも、佐伯さんが心の奥に隠していたものを引きずり出すための行為となっている。二人の関係の両義性、母―息子であり恋人同士である設定は、母と子が真摯に向き合うための手続きといえよう。そのため、オイディプス神話の設定、近親相姦のテーマ追求よりも、〈母に捨てられた子〉と〈子を捨てた母〉の物語の比重が重くなっている。

そのことは、裸の心になった二人が森の中で出合い、互いの思いを伝え合う場面がカフカ章のクライマックスとなっていることからも明白である。佐伯さんは「私は遠い昔、捨ててはならないものを捨てたの」、「私が何よりも愛していたものを、私はそれがいつかうしなわれてしまうことを恐れたの。だから自分の手でそれを捨てないわけにはいかなかった。奪いとられたり、何かの拍子に消えてしまったりするくらいなら、捨ててしまっほうがいいと思った」(47章)と語る。佐伯さんは母としての真摯な思いをカフカに伝え、カフカは自らが母に愛されていたことを知り、母を許す(「お母さん、と君は言う。僕はあなたをゆるします。そして君の心の中で、凍っていたなにかが音をたてる」47章)。

斎藤学氏は(役割としての)「母」について、次のように述べている⁽¹⁴⁾。

母の役割は何か。それは「つなぐこと」と前にいいました。つないで関係をつくるために、母は子の存在を「承認」しなければなりません。承認は、あるがままのその子を認め、その必要を満たすことです。子ども一般ではなく、「その子」の承認でなければなりません。他の子ではない「あなた」、それを私は必要とする、という母の視線(ふるまい)のことをラカンが「母の欲望」といっています。母の欲望とは、「母が自分を必要としていること」の「自分の必要」のことです。自分を必要としている母を「感じる」ことによつて、ようやく子どもたちは自らの生命の入り口を通れるのです。

カフカは父の呪いの言葉から逃れるために家出をするが、それは言い換えれば「サバイバー」が「母」からの「承認」を得るためへの旅でもあった。森の中の佐伯さんの言葉により、カフカは「母」からの「承認」を受け、自らの生命の入り口を見つけ出すことができたと言える。加藤典洋氏は「田村カフカのように、完全に損なわれた存在が、回復しうるただ一つの回路は、自分を棄けた人間が、かつては自分と同じように、人に捨てられた人間だったと、深く、心の底から、思い知ることである」と述べている⁽¹⁵⁾。ただ佐伯さんの場合、愛する者から「棄てられた」わけではなく、死別している。「自分を棄けた人間が、かつては自分と同じように、人に捨てられた人間だった」わけではない。その意味で、カフカと佐伯さんの立場は異なる。佐伯さんは、全存在をかけた愛した相手が無意味に残酷に殺されたため、人を信じられなくなったのである。恋人の死があまりにも無意味で、残酷であったためにその恐怖と怒りは激しく、佐伯さんの存在自体を破壊した。

佐伯さんは森の中で、愛するカフカが恋人のように永遠に失われてしまったことを恐れ、自ら捨ててしまったと語る。カフカを愛すれば愛するほど、恋人を失った時の恐怖を思い出し、その経験を繰り返したくないと考えていた。つまり、佐伯さんはカフカを産み、再び愛する対象を得、一つの人生の契機を迎えたが、愛する人を失う恐怖を克服してはいなかった。そのため、子を捨てるという通常では母親が行わない行動を取ってしまう。

母親が母性を否定することは、近現代社会においてはタブーとされてきた。「子育ての担い手としての父親の役割が見直されるようになりつつある現在でさえ、なお社会には母親の役割を理想化しようとする根強い母親神話がある」。「よい母親」でない母親への世間の目はきびしく、母親の困難な状況への理解は得られない。おまけに、子育てという仕事は社会的に評価されない¹⁾。佐伯さんの行動は、母性神話の中では非常に反モラルであり、テキスト内でも「女の人のというのは、そういうことほしくないもの」(11章)と尋常ではない行為として扱われている。(母に捨てられた子)であるカフカは、「僕には母に愛されるだけの資格がなかったのだろうか？」(43章)と自省する。このように佐伯さんの行為は自分自身の存在理由を見失い、解離性同一性障害へ至る強烈なトラウマとして機能している。しかし、母に子を捨てさせるほどの強い怒りを生み出したもの、「サバイバー」としての彼女の闇を追うことは、未だパッドマザーが存在しにくい現代社会において、一つの可能性を見いだすことに繋がるのではないだろうか。

1-2 〈母〉の恐怖と怒り―「連中」・「システム」―

佐伯さんの怒りを理解することがカフカの救いの鍵であったが、怒りは「サ

バイバー」の特徴でもある。全ての「サバイバー」は「怒り」の感情を持っており、彼らの「傷ついた部分」は、優しく保護されなかったことや信頼を裏切られたことに怒っている¹⁾。佐伯さんの怒りの内実を探る方法として、本稿では大島さんに注目する。大島さんは図書館の設備について二人組の女性から「女性的見地」からの批判を受け、自身のトランスジェンダー性を告白し、退散させる。彼女たちのような二人組について、大島さんは「佐伯さんの幼なじみの恋人を殺してしまったのも、そういった連中なんだ。想像力を欠いた狭量さ、非寛容さ。ひとり歩きするテーゼ、空疎な用語、篡奪された理想、硬直したシステム。僕にとつてほんとうに怖いのはそういうものだ。僕はそういうものを心から恐れ憎む」、「想像力を欠いた狭量さや非寛容さは寄生虫と同じなんだ。宿主を変え、かたちを変えてどこまでもつづく。そこには救いはない」(19章)と語る。佐伯さんは恋人を殺したものを強く憎んでいた。大島さんの言葉で語られているが、この強い怒りは佐伯さんの思いも反映していると考ええる。注目したいのはここで描かれた「連中」が、村上が幾度も描いてきた「連中」であることである。「沈黙」(一九九一)では次のように描かれている。

でも僕が本当に怖いと思うのは、青木のような人間の言いぶんを無批判に受け入れて、そのまま信じてしまう連中です。自分では何も生み出さず、何も理解していないくせに、口当りの良い、受け入れやすい他人の意見に踊らされて集団で行動する連中です。彼らは自分が何か間違ったことをしているんじゃないかなんて、これっぽっちも、ちらっとでも考えたりはしないんです。自分が誰かを無意味に、決定的に傷つけているかもしれないなんていうことに思い当たらないような連中です。彼らはそういう自分たちの行動がどんな結果をもたらそうと、何の責任も取りやしないんです。本当に怖い

のはそういう連中です。(後略)」

「ねじまき鳥クロニクル」(一九九四〜九五)においては、綿谷昇を支持する大衆が「連中」にあたる。複数のテキストにおいて幾度も怒りを表明するほど、作者の思いは強く、年代を経る毎に攻撃性が増している。自分自身の考えではなく誰かの物差しを仰ぎ、それを「想像力を欠いた狭量さや非寛容さ」でもって裁く態度には「救い」がない、と大島さんは断罪する。「連中」とは、システムを金科玉条とし、「想像力を欠いた狭量さや非寛容さ」でもってシステムを他者に押しつける集団である。大島さんのトランスジェンダーが語られたこの場面は、ジェンダーの問題のみならず、大島さんを通じた佐伯さんの怒りを表していると考ええる。

今ひとつ、佐伯さんがカフカを捨てた理由として、カフカの父に向けられた恐怖と怒りがある。佐伯さんは、恋人を失ってからカフカを産み、再び愛する対象を得た。しかし、子どもが佐伯さんのことを必要としていることがわかっているにもかかわらず、自ら捨てるほどの怒りが生まれた。それは、田村浩一の元にいたくないという強い思いと言える。佐伯さんは恋人との世界を続けたいために入り口を開け、「海辺のカフカ」という曲を生み出す。しかし、その報いとして最愛の恋人を失ってしまう。佐伯さんが開けてしまった入り口によって芸術の力を得た田村浩一は、その力をより強力に利用しようとしていた。佐伯さんは入り口を開けてしまった自分自身と、力を悪用しようとする田村浩一双方に対しての強い恐怖と怒りを覚え、自らの愛する者を自分の手で捨ててしまった。

田村浩一と思われるジョニー・ウオーカーは「善とか悪とか、情とか憎しみとか、そういう世俗の基準を超えたところにある笛(カラスと呼ばれる少年)

で、(ひとつのシステム)を作ろうとしていた。ジョニー・ウオーカーは、「ねじまき鳥クロニクル」の綿谷昇と同じ存在であり、これは村上が最も警戒する「システム」と繋がっている。

あなたは誰か(何か)に対して自我の一定の部分を差し出し、その代価としての「物語」を受け取ってはいないだろうか？ 私たちは何らかの制度システムに対して、人格の一部を預けてしまっていないだろうか？ もしそうだとしたら、その制度はいつかあなたに向かって何らかの「狂気」を要求しないだろうか？ あなたの「自律的パワープロセス」は正しい内的合意点に達しているだろうか？ あなたが今持っている物語は、本当にあなたの物語なのだろうか？ あなたの見ている夢は本当にあなたの夢なのだろうか？ それはいつかとんでもない悪夢に転換していくかもしれない誰か別の人間の夢ではないのか？(「アンダーグラウンド」あとがき)

その壁は名前を持っています。それは「システム」と呼ばれています。そのシステムは本来は我々を護るべきはすのものです。しかしあるときにはそれが独り立ちして我々を殺し、我々に人を殺させるのです。冷たく、効率よく、そしてシステムティックに。

私が小説を書く理由は、煎じ詰めればただひとつです。個人の魂の尊厳を浮かび上がらせ、そこに光を当てるためです。我々の魂がシステムに絡み取られ、貶められることのないように、常にそこに光を当て、警鐘を鳴らす、それこそが物語の役目です。(エルサレム賞受賞スピーチ「壁と卵」)

佐伯さんの怒りの内実をみると、「連中」や「システム」に対する批判と結

びついていることがわかる。愛する者を無意味に残酷に殺され「サバイバー」となった佐伯さんが、最も怒りを感じているのはシステムに迎合する「連中」である。ただ死なずに生きている状態の中カフカが生まれ、佐伯さんに転機が訪れた。再び子どもという愛する対象を手に入れたにも関わらず、愛以上の恐怖と怒り（システムを悪用する人物とそれを結びつけてしまった自分自身）が彼女を襲う。母が子どもを捨てるという事実は、それほど彼女の怒りが強かったことの現れであり、田村浩一という存在の邪悪さと結びついている。

佐伯さんはナカタさんの訪れにより、死去する。彼女が半生をかけて書き上げた手記もナカタさんによって焼却され、彼女の生は無くなったように見える。ただ、佐伯さんは森でカフカに許しを請い、「あなたに私のことを覚えておいてほしいの。あなたさえ私のことを覚えてくれれば、ほかのすべての人に忘れられたってかまわない」（47章）と願う。愛する人に記憶され、それが未来へ繋がってゆくということこそ、彼女の願いであった。これは「記憶の分有」の一つの形と考えられる。

カフカと佐伯さんは双方とも「サバイバー」である。心に大きな傷を負いながら生き延びてきた二人にはそれぞれ別の決着がつけられている。カフカは自らを捨てた母の怒りを理解することで許し、新しい生を歩み始める。カフカは「サバイバー」から「スライバー」（サバイバーであることを主張する必要がなくなった人、成長した人）へと変化したのである。佐伯さんは死去するが、その生は全て無になつたのではない。カフカの中に佐伯さんの記憶が残る限り、彼女は別の形で生き続けることとなる。

二、生き直される生——星野青年の意味——

二—1 三人目の「サバイバー」——ナカタさん——

佐伯さんの「サバイバー」としての怒りをカフカが理解し「許す」ことによって、負の連鎖は絶たれた。ただ、カフカ章の救いを成立させるためにナカタさんの犠牲が必要とされている。ナカタさんも虐待を受けていたと推測されており、虐待「サバイバー」と言える。

典型的な都会の優等生であったナカタさんが「サバイバー」に至った（出来事）として、太平洋戦争が描かれている。この戦争の描写については、これまでテキストの評価と直結してきた。

ナカタ少年は優秀だったが、諦観のようなものが感じられる少年だった。加えて虐待の推測が岡持節子先生の口から語られる。心に複雑な悩みを持つナカタ少年に岡持先生は急に始まった生理の血が付いた手ぬぐいを見つけたことで、衝動的に暴力を振るってしまう。岡持先生は前夜の性的な夢やその日の性的な夢想に対する恥ずかしさを指摘されたように感じ、その暴力は非常に激しいものとなってしまった。これがきっかけでナカタ少年は昏睡状態になり、記憶を全て失う。

先述したように「サバイバー」の症状の一つに「解離性健忘」がある。小森氏も指摘しているが、強いトラウマにより一部、および全ての記憶が消えてしまうというものである。テキストには、生き延びた人としての三人の「サバイバー」が描かれているが、カフカは「解離性同一性障害」、佐伯さんは「離人症」、ナカタさんは「解離性健忘」の症状を併せ持つ人物として描き分けられている。三人は解離の症状を持つ「サバイバー」たちであるという共通項があり、それが三人を結びつける必然性となっている。

ナカタさんは影が半分しかない人間であり、更に意識を自由に切り替えられるという設定（通電状態）がなされている。この「通電状態」はナカタさんが子どもの頃から日常的に行ってきた行為とある。稿者はナカタ少年が意識を失う前から日常的な暴力を受けている間の逃避として「通電状態」を行ってきたと捉える。ナカタ少年は意識の分断が可能であり、そのような少年だったからこそ、昏睡状態の際「深淵」に踏み込むことができたと考えるからである。

しかし、ナカタ少年はこちらの世界へ帰還する際、影を半分残さざるをえず、その影に付随すると思われる記憶と学習能力も失うことになる。「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」（一九八五）における影は心を司っていたが、「海辺のカフカ」では記憶と識字学習能力が該当する。ただ、ナカタさんに関しては、諦念が見える少年から猫と話のできる非常に魅力的なキャラクターに変化しており、必ずしも全て悪い結果になっているとは言えない。ナカタさんは自らの境遇に知足しており、人生を安らかに送ってきた。

ナカタさんの運命を変えたのはジョニー・ウォーカーと関わり、彼をカフカの代わりに殺すことになってしまったことである。ジョニー・ウォーカーは、ナカタさんが探している猫（ゴマ）を無事に返す代わりに、自分を恐怖と憎しみを持って殺せと命ずる。「これは戦争なんだとね。それで君は兵隊さんなんだ」（16章）と現在の状況を戦時における人殺しをせざるをえない極限状況と同じと語る。極限状態で人を殺すことを強いられるという意味で「戦争」が使用されている。

小森氏は、ナカタさんが戦中の記憶を失った原因が「全て岡持節子先生という性欲を抱いた女性に転嫁させられ」、「歴史の否認、歴史の否定、そ

して記憶の切断という特別の悪意を感じます」と痛烈に批判した¹⁾。ただ、柴田勝二氏が指摘するように「岡持先生は〈中田少年〉を罰したのではなく、そこに映し出されている自分自身の性欲を否認した²⁾」。この暴力を引き起こしたものは戦時下の価値観であり、岡持先生の振るう暴力の主体は〈天皇〉に結びつく³⁾と氏は述べている。稿者も柴田氏と同様に、岡持先生の暴力は〈中田少年〉を罰したのではなく、戦時中の価値観（女性の性欲の否定）に基づく⁴⁾と考える。ただ、暴力の主体が〈天皇〉に結びつく⁵⁾と考えない。つまり、これらの暴力は「歴史の否定」でも「天皇」に繋がるものでもない⁶⁾と捉える。

都甲幸治氏は村上が翻訳を行う作品の傾向について、三つの特徴を挙げている⁷⁾。1「読んで面白い。その場合、偉い人が書いているとか、文章が前衛的だとかは評価しない。あくまで文章は読みやすく、ストーリーがはっきりしているほうがいい」、2「人種・階級・ジェンダーといった社会問題を扱っていても評価しない。そしてまた、そうした問題の欠如を問題視したり、ましてや苦悩したりしない。言い換えれば、左翼的な文学観を一切認めない」、3「国家の論理と戦っている。これは集団の持つ暴力を感じとり、それに対峙する姿勢と言ってもいい」。氏は続けて「このうち三つ目が最も理解しにくい。ここに村上の政治性が表れているのだが、そもそも国家と対峙するのは左翼的な姿勢ではないのか。だがそうではない、と村上は言う。『ノルウェイの森』で主人公が語っているように、左翼の人々は時として自らの集団がもたらす暴力に鈍感だ。むしろ個人として、あらゆる組織の暴力性を批判するのが文学の責務である、と村上は考える」と述べている。

都甲氏に稿者も賛同する。村上テキストでは、個人の尊厳を圧迫するシ

システムと対峙する主人公が描かれるが、それは一般的な左翼的な行動を伴ったものとしては描かれてはいない（「羊をめぐる冒険」「ねじまき鳥クロニクル」など）。「海辺のカフカ」においても、戦争というものの暴力性に敏感であるが、それを批判する方法として、戦争の歴史性に直接コミットはしていない。その姿勢が果たして政治性と呼べるのかといった点に論者の評価が反映されると思われる。²²⁾

稿者の立場として、「海辺のカフカ」における戦争の形象は、一人の人間の記憶を暴力的に奪い、その後の人生を大きく変える（出来事）であり、それは現代を生きる我々にも形を変えて襲ってくる（システム）と同義と捉える。テキストに描かれているのは暴力によって「サバイバー」となってしまった者の物語であるからである。システムに迎合する連中の理不尽な暴力により最愛の恋人を殺された佐伯さん、母から捨てられ、父からの（精神的な）虐待を受けたカフカ、親からの虐待と戦時中の価値観で暴力を受けたナカタさん。三人の「サバイバー」たちは、国家というシステムが絡むものから肉親と言った様々なレベル分けがなされているが、それぞれ暴力によって回復が難しいほど傷つけられている。ここに「個人として、あらゆる組織の暴力性を批判する」という村上のスタンスが明確に現れている。

ナカタさんはジョニー・ウオーカーを殺害後、何かに導かれるように四国を目指す。ナカタさんは猫と話すことができる人物であったが、そのような超自然的な力はより強力になり、「ものごとをあるべきかたち」に戻す役目として、入り口の石を探し、佐伯さんの元を訪れ、彼女の人生を静かに終わらせる。

超自然の力を持ちながらも、ナカタさんは自らを空っぽであると捉え、

自らの存在の危険性についても認識している（「空っぽということとは、空き家と同じなのです。鍵のかかかっていない空き家と同じなのです。入るつもりになれば、なんだって誰だって、自由にそこに入ってこられます。ナカタはそれがとても恐ろしいのです」32章）。この「空っぽ」という性質によって、ナカタさんは死してなおジョニー・ウオーカーが入り口の石に入るための通路とされる。²³⁾このように、ナカタさんはカフカの代わりにジョニー・ウオーカーを殺害し、佐伯さんが開けてしまったため崩れてしまった世界のバランスを戻すため四国に訪れ、死してなおジョニー・ウオーカーに通路として利用されるというカフカを支えるための捨て石のような存在になっている。しかし、星野青年に着目すると、ナカタ章の別の意味、ナカタさんの生きた証が浮かび上がってくる。

二―2 生き直される生 ―ナカタさんから星野青年へ―

星野青年は死んだ祖父を思い起こさせるナカタさんを成り行きで四国に連れて行くことになるが、次第にナカタさんの人間性に惹かれてゆく。ナカタ章は甲村図書館で動きがないカフカ章と対の関係にあり、「物語」を動かす動的な役割を担っている。彼は観念的客体であるカーネル・サンダースが現れ、入り口の石を手に入れるといった（seek and find）や、神話を想起させる怪力で入り口を開けるといった行動などでナカタ章のダイナミズムを支えている。ただ、この段階では青年はナカタさんの手足にすぎない。

しかし、眠ったナカタさんの目覚めを待つ時間をつぶすため、ある喫茶店でベートーヴェンの大公トリオを聴いたことで青年は変化する。彼は内

省的になり、「ナカタさんが空っぽなら、俺なんてどう考えたって、空っぽ以下じゃないか。ナカタさんには少なくとも、わざわざ四国までついていこうと俺に思わせるような何かがある」(34章)と考える。ナカタさんは識字障害になってから自らの能力の低さを自認し、自分は「頭が悪い」人間なのだと捉えてきた。また、ジョニー・ウォーカーに利用される自らの空っぽの性質を危険なものと感じている。しかし、星野青年は空っぽに見えるナカタさんの中に、自分自身にはない美質(四国まで俺についていこうと思わせる何か)を見出す。ナカタさんの姿は、彼にベートーヴェンや釈迦、イエス・キリストを想起させてもいる。

明くる日、青年は今まで見たこともないフランソワ・トリュフォーの映画を見て、その魅力を感じ、喫茶店に再訪する。二度目はハイドンの協奏曲1番を聞き、「生きている限り、俺はなにもかだった。自然にそうなっていたんだ。でもいつのまにかそうではなくなってしまった。生きることによって、俺はなにもでもなくなってしまった。生きたら生きたら俺は中身を失っていった、ただの空っぽな人間になっていったみたいだ」(34章)と自らの存在の空虚さに気づく。内省は更に進み、このような人生の流れを変えたいと願うようになる。二度の音楽体験が青年を変化させた。甲村図書館を訪れた彼は大島さんに「音楽には人を変えてしまう力があると思う? つまり、あるときにある音楽を聴いて、おかげで自分の中にある何か、がらっと大きく変わっちゃう、みたいな」(40章)と尋ねる。大島さんはそのような音楽体験はあると同意し、「恋と同じです」(40章)と答える。大島さんの恋という言葉は、カフカから佐伯さんとの関係を尋ねられた経緯を述べていることから、カフカの恋と同種の扱いとしてこれらの音楽体験は描かれている。この段階で、星野青年はナカタ章におい

ての主人公と呼べる重要な存在になりつつある。

佐伯さんのファイルを焼却した後、青年はナカタさんの人間性が自分ほどのように影響したかを語る。「おじさんは俺という人間を変えちゃったからだ。うん、このたった10日のあいだに、俺は自分がすごく変わっちゃった気がするんだ。なんていうのかね、いろんな景色の見え方がずいぶん違ってきたみたいだ。これまでなんともなくへろっと見てきたものが、違う見え方がするんだよ」(44章)。彼はナカタさんと過ごし、音楽体験を経ることで、自身の認識の変化を感じている。更に、それは「ナカタさんの目を通してものを見るようになったからなんだ」(44章)と分析している。この場面は非常に重要である。ここで「サバイバー」であったナカタさんの人間性が星野青年に受け継がれたことが見て取れるからである。ナカタさんは自らを「空っぽ」と捉え、「正しいことであれ、正しくないことであれ、すべての起こったことをそのまま受け入れて、それによって今のナカタがあるのです。それがナカタの立場であります」(42章)と自らの性質を捉えてきた。「ナカタさんの目」とは、先入観を持たず、物事があるがままに受け取る姿勢である。青年はナカタさんと関わり、様々な超自然の出来事と遭遇したが、非日常の出来事があるがまま受け入れ、一つずつ我慢強く対応してゆく。音楽体験とナカタさんとの関わりで、そういった姿勢が彼に深く根付いたのである。

もはや星野青年はナカタさんの手足ではなくなった。つまり、自分で考えることを放棄し誰かのシステムに従うのではなく、ナカタさんの「世界を見る姿勢」を自らの血肉とし、自分で判断して行動するようになったのである。このようにナカタさんの「世界を見る姿勢」が青年に受け継がれたから、ナカタさんは死去する。まだ入り口の石は閉じられていないが、

それは完全にナカタ章の主人公となった青年の行うべきものとなる。

ナカタさんの突然の死去に呆然としながらも、青年は入り口の石を閉じるために、何かが起きるのを待ち続ける。石を前にしながら彼は自分の人生を振り返り、自身が「めんどくさいこと」を避け、責任を放棄し、女性たちに傲慢な態度で接してきたことを悟る。自らの傲慢さを自覚した後、ナカタさんの資格を受け継いだ証として、彼は猫と会話することができるようになる。この意味は大きい。カラスと呼ばれる少年（カフカの別人格）は入り口の石に入るためリンボで待機しているジョニー・ウオーカーを殺そうと攻撃するが、「資格」がないために、不首尾に終わっている。つまり、カフカには「資格」がないが、星野青年にはある。この差は、自らの傲慢さを認識するという差なのではないだろうか。「サバイバー」であり、かつ少年であるカフカは、傷ついた自分自身を回復させることに精一杯で、自らの傲慢さを認識することはない。むしろ、「母と姉を犯す」という呪いを積極的に引き受けて、佐伯さんやさくらさんとの（夢での行為を含む）肉体関係を結んで、自らの運命を受け入れる。対して、星野青年は失った人生を変えようと決意し、その後自らの人生を振り返り自分の傲慢さを自覚する。そういった点に「資格」の有無が左右されていると考える。

猫のトロは星野青年に、「あいつ」を「圧倒的な偏見を持って強固に抹殺」しろと告げる。それが人生の責任を回避していい加減に生きてきた借りを返す行為だとも語る。青年は夜中にナカタさんの口から這い出てきた「こいつ」の邪悪さを感じ、入り口の石を開けたときと同じように、神話を想起させるような怪力を持つて入り口を閉じ、無力化したジョニー・ウオーカーを抹殺する。

「これから何かちよつとしたことがあるたびに、ナカタさんならこういふときにどうするだろうって、俺はいちいち考えるんじゃないかってき。なんとなくそういう気がするんだね。で、そういうのはけっこう大きなことだと思ふんだ。つまりある意味ではナカタさんの一部は、俺つちの中でこれからも生きつづけるってことだからね」（48章）

ナカタさんは生前自らが空っぽであると認識した際、「ナカタははつきりと普通のナカタに戻りたいと思うのです。自分の考えと自分の意味を持ったナカタになりたいのです」（32章）と未来への希望を語ったが、死去する。ナカタさんの望みは果たされなかったように見えるが、彼の語りは、ナカタさんが彼の中で生き続けることを意味している。

星野青年は「サバイバー」ではない。解離の状態に陥らなければ生きていけなかった「サバイバー」たちのような深いトラウマを持たず、「めんどくさい」ことから逃げてきた普通の青年である。しかし、彼はナカタさんと関わることで変化し、成長する。そして、ナカタさんの「世界を見る姿勢」を自らに取り入れ、その後の人生を生きてゆくことを決意する。傷つき識字能力が失われ、家族や友人を持つこともない人生を送ってきたナカタさんは星野青年によって生き直されるのである。これは「サバイバー」の痛みを「サバイバー」ではない者が受容し、彼らの生を新たに生き直すことに繋がるのではなからうか。

岡氏は〈出来事〉と小説の意義について次のように述べている。²⁴

〈出来事〉というものが本質的にはらみもっている再現することの不可
能性、それをいかにしてか語るることによって、小説はそこに、言葉では

再現することのできない〈現実〉があることを、言いかえれば〈出来事〉それ自体の在処を、指し示すのではないか。言葉によって、もし、すべてが説明されるのなら、小説なるものが書かれなければならない致命的な必要もないだろう。

確かに、ナカタさんの〈出来事〉、戦時中の暴力により解離性健忘になったこと、ジョニー・ウォーカーを殺したことなど、暴力に関する〈出来事〉の全てを青年は受け継いだとは言えない。しかし、彼はナカタさんという人間を愛し、ナカタさんの代わりに圧倒的な偏見を持って、邪悪な存在を抹殺する。このように、星野青年がナカタさんの「世界を見る姿勢」を受け継ぐということは、「記憶の分有」の一つの形と呼べるのではないだろうか。

「出来事」というものが本質的にはらみもっている再現することの「可能性」は、佐伯さんの人生においても重要な意味を持つ。彼女は自分の人生を記した手記を誰にも読ませず、ナカタさんに焼却してもらった。小森氏は記憶の抹殺と呼んだが、「〈出来事〉」というものが本質的にはらみもっている再現することの「不可能性」を考えるならば、手記が存在してもしなくても本質的には変わらない。体験したことをそのまま伝えることは不可能である。しかし、全てを理解しなくても、部分的な記憶や「世界を見る姿勢」を受け継ぐということは、その人が生きてきた証を分有することに繋がるのではないだろうか。

おわりに

「海辺のカフカ」という〈物語〉は、「サバイバー」である佐伯さんの記憶を「サバイバー」であるカフカが受け継ぎ、自らの「サバイバー」性を克服するカフカ章、「サバイバー」であるナカタさんの「世界を見る姿勢」を「サバイバー」でない星野青年が受け継いでゆくナカタ章という二つで構成されている。カフカ・星野青年とも愛する人間の記憶を受け継いで自らの新しい人生を切り開いてゆくという結末になっている。

本稿の前半では佐伯さんの怒りに注目した。母に子を捨てさせるほどの怒りを生み出したもの、それは「寄生虫」のような連中やシステムである。「サバイバー」となった佐伯さんが生み出した怒りが、カフカを「母に捨てられた子」としての「サバイバー」とさせ、心を病ませる。「なぜ誰かを深く愛するということが、その誰かを深く傷つけるといふのと同じじゃなくちゃならないのか」、「もしそうだとしたら、誰かを深く愛するということにいったいどんな意味があるんだ？」(43章)。この負の連鎖を「許す」ということで断ち切るように物語は描かれている。

また、圧倒的な暴力によって記憶を失い、記憶障害となったナカタさんは、「ものごとをあるべきかたち」に戻すという役目を果たし、そのまま死去する。ナカタさんの死は唐突であり、カフカ章の救いを成り立たせるための犠牲的な要素もある。しかし、ナカタ章では、ナカタさんの魅力ある人間性とともに、その人間性を星野青年が受け継ぐ過程が描かれている。これまで看過されることが多かった星野青年であるが、「サバイバー」ではない人間が「サバイバー」の人間性を愛し、その見方を持って生きるといふ重要な意味を持っている。つまり、自らを「空っぽ」であると感じつつ死去したナカタさんの代わりに、ナカタさんが歩めなかった生を生き直すことに繋がるからである。

更に「サバイバー」ではない星野青年が「サバイバー」の記憶を受け継

ぐという点には、より可能性が見られる。「サバイバー」はその深いトラウマにより、社会的な人生を送ることが困難な人々であり、彼らのトラウマを全て理解することは不可能である。しかし、「サバイバー」でない者も彼らの記憶や「世界を見る姿勢」を受け継ぎ、彼らの生きた証を分有することは可能なのである。星野青年は衝撃的な〈出来事〉によってトラウマを抱えた人たちとの関わりにおいて重要な示唆を持つ人物として描かれている。カフカにはない「資格」を受け継ぐ者としても、星野青年はナカタ章の主人公として、より重要な存在として捉えられるべきなのではないだろうか。

* テキストは『海辺のカフカ』（新潮社、二〇〇二年）、『レキシントンの幽霊』（文藝春秋、一九九六年）、『アンダーグラウンド』（講談社、一九九七年）、『村上春樹 雑文集』（新潮社、二〇一一年）を使用した。

注

- (1) 特定非営利活動法人 日本トラウマ・サバイバーズ・ユニオン (<http://www.jist.or.jp/>) の用語集「サバイバー」より。
- (2) 岡真理『思考のフロンティア 記憶／物語』（岩波書店、二〇〇〇年）
- (3) 浅利文子『海辺のカフカ』責任と救済―複式夢幻能の影響―（『異文化 論 文編』法政大学国際文化学部 二〇一六年）
- (4) 解離性障害とは、自己の持つ意識や感覚などが、そのままとまりを失い自己から切り離され、自分が自分であるという感覚や現実感などが曖昧になったり、失われたりする障害のことである。

参照 (<https://survivorstar.themedia.jp/pages/165500/problems>)

解離の諸症状には、解離性同一症／解離性同一性障害 (Dissociative Identity Disorder)、解離性健忘 (Dissociative Amnesia)、離人感・現実感喪失症／離人感・現実感消失障害 (Depersonalization / Depersonalization Disorder)、他の特定される解離症がある。その他の中には、1 混合性解離症の慢性および反復性症候群、2 長期および集中的な威圧的説得による同一性の混乱、3 ストレスの強い出来事に対する急性解離反応、4 解離性トランスがある。『DSM ー5 精神疾患の分類と診断の手引き』医学書院、二〇一四)

- (5) 代表的なものは、加藤典洋『テキストから遠く離れて』講談社、二〇〇四年）である。また、『海辺のカフカ』は精神医学、心理学関係者の論文が多いことが特徴であり、以下に列挙する。木部則雄「精神分析的改題による『海辺のカフカ』」『百合女子大学研究紀要』二〇〇三年一月、明石加代「消えた猫と戻ってきた少年 村上春樹「人食い猫」から『海辺のカフカ』へ」『心の危機と臨床の知』二〇〇七年二月、横山博「村上春樹『海辺のカフカ』における近親相姦と解離」『甲南大学紀要 文学篇』二〇〇三年）、田中雅史「内部と外部を重ねる選択―村上春樹『海辺のカフカ』に見られる自己愛イメージと退行的倫理」『甲南大学紀要 文学篇』二〇〇六年三月）、山岸昭子「発達心理学から見た『海辺のカフカ』―なぜ主人公は危機を乗り越えることができたのか」『順天堂大学医療看護学部 医療看護研究Ⅰ』二〇〇五年）、岩宮恵子「村上春樹『海辺のカフカ』から―カラスの言葉『君はこれから世界でいちばんタフな15歳の少年になる』」『児童心理』二〇一六年一月）
- (6) 『テキストから遠く離れて』講談社、二〇〇四年）
- (7) 虐待サバイバーを支援している「サバイバーズスター」のウェブサイトを (<https://survivorstar.themedia.jp/pages/165500/problems>) では、虐待によって

- 起こる影響を十一項目挙げている。① 共依存、② 認知の歪み、③ 過剰適応、④ 自傷行為、⑤ 自律神経失調症、⑥ うつ病、⑦ 不安障害、⑧ 睡眠障害、⑨ 解離性障害、⑩ 摂食障害、⑪ 複雑性外傷後ストレス障害。
- (8) 横山博「村上春樹『海辺のカフカ』における近親相姦と解離」(『甲南大学紀要 文学篇』二〇〇三年)、小森陽一「村上春樹論―『海辺のカフカ』を精読する―」(『平凡社』二〇〇六年)。
- (9) 野中潤氏がまとめた「海辺のカフカ」研究史において、星野青年を扱った論文は見られない。これまでの主眼は主人公カフカ、およびナカタさんである(千田洋幸、宇佐見毅編『村上春樹と二十一世紀』おうふう、二〇一六年)。
- 管見の限り、星野青年のことを前面に押し出したものは、小林宣之氏の公開講座講義録「星野青年、目覚める」(『平成22年度大手前公開講座講義録「味覚と文芸」』二〇一一年三月)である。小林氏は、星野青年が音楽と出会って成長することに主眼を置いている。主として音楽作品とテクストの影響関係について論じており、星野青年の重要性については言及されていない。
- (10) 小森陽一「村上春樹論―『海辺のカフカ』を精読する―」(平凡社、二〇〇六年)
- (11) 平野葵「『1Q84』の(母)たち『海辺のカフカ』との対比において」(村上春樹 表象の圏域―『1Q84』とその周辺』森話社、二〇一四年)
- (12) 斎藤学『インナーマザーは支配する 侵入する「お母さん」は危ない』(新講社、一九九八年)
- (13) 『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』(文藝春秋、二〇一〇年)
- (14) 斎藤学『インナーマザーは支配する 侵入する「お母さん」は危ない』(新講社、一九九八年)
- (15) 『アクトから遠く離れて』(講談社、二〇〇四年)
- (16) 引用は橋本やよい『母親の心理療法 母と水子の物語』(日本評論社、二〇〇〇年)。
- その他、J・スウィガード『パッドマザーの神話』(誠信書房、一九九五年)にも同様の見識が見られる。
- (17) ケイティ・エバンズ/J・マイケル・サリバン『虐待サバイバーとアディクション』(金剛出版、二〇〇七年)
- (18) 斎藤学『インナーマザーは支配する 侵入する「お母さん」は危ない』(新講社、一九九八年)
- (19) 「村上春樹論―『海辺のカフカ』を精読する―」(平凡社、二〇〇六年)
- (20) 柴田勝二(「殺し、交わる相手―『海辺のカフカ』における過去」(『東京外国語大学論集』二〇〇八年)
- (21) 都甲幸治「教養主義の終りとハルキムラカミ・ワンダーランド 村上春樹の翻訳」(『村上春樹翻訳(ほとんど) 前仕事』中央公論新社、二〇一七年)
- (22) 「海辺のカフカ」の歴史性に対して、非常に批判的な立場を取るのは前出の小森陽一氏であるが、尹相仁氏は村上文学における歴史性について、韓国人表象を例に挙げ、次のように述べている。「二人とも(引用者注 ミュウ・タマル)日本の主流社会に飼いならされた存在として描かれている。「在日」という素性は絶えず「歴史」を呼び起こす存在であるはずだが、村上の小説のなかではその歴史性は消し去られるか、希薄になっていることが認められる」と述べている。尹相仁「村上春樹と東アジアの間を往還するもの」(『WASEDA RILAS JURNAL』二〇一四年一〇月)
- (23) 中身がないことによって悪しき者に利用されるというのは、「木野」(二〇一四)においても描かれているテーマである。「海辺のカフカ」の段階では、ナカタさんという個性的なキャラクターにおける役割だったが、「木野」では、平凡な主人公においてもそのようなことが起きるとしている。自分というものを持たずに、他者に流され、それが悪しきシステムに利用されること

の危険性を作者はより重要視している。

(24) 岡真理『思考のフロンティア 記憶／物語』（岩波書店、二〇〇〇年）

付記

本稿は第四回村上春樹国際シンポジウム（二〇一五年七月二十五日、北九州国際会議場）「母の怒り―村上春樹「海辺のカフカ」における母と子の両義性を視座として―」、第六回村上春樹国際シンポジウム（二〇一七年七月九日 同志社大学）「生き直されるサバイバーの生―「海辺のカフカ」におけるナカタ章の（魅惑）を基に、大幅な改稿を施したものである。席上、多くの貴重な意見を賜った。記して、感謝申し上げる。

（やまね ゆみえ、広島国際大学非常勤講師）